

【書評・紹介】

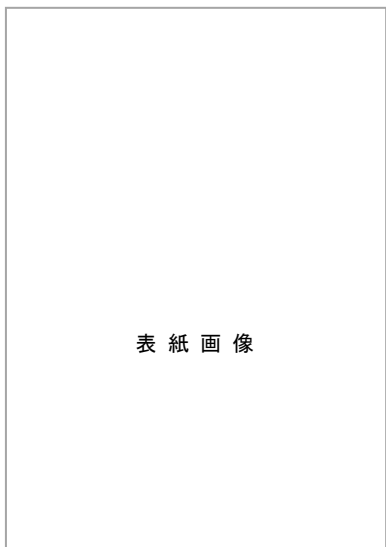
北海道博物館協会学芸職員部会 編

『北の学芸員とっておきの《お宝ばなし》

—北海道で残したいモノ 伝えたいコト—』

(札幌, 寿郎社, 2016年11月, B6判, 343頁, 1,500円+税)

荒山千恵



本書は、北海道博物館協会学芸職員部会のウェブサイト「集まれ！北海道の学芸員」で2013年から2014年に連載されたコラムリレー「北海道で残したいモノ、伝えたいモノ」が再編集され、51編が1冊の本に集成されものである。北海道博物館協会学芸職員部会は1977年の設立、本書の出版された2016年は40周年を迎えた記念の年である。北海道内各地の博物館等に勤務する学芸員有志が、日頃の調査研究や地域の方々との取り組みで明らかになったことなどを、広く一般向けに紹介するもので、いずれも短編でまとめられている。各地の自然・歴史・文化に関する様々な事柄が執筆者51名の個性豊かな視点で記されている。

本書の章立ては次のとおりである。

はじめに

北海道の学芸員たちが明かす〈とっておきのお宝ばなし〉の世界へようこそ

第1章 謎を秘めた北海道の生き物たち

01 イトウ／02 サケが遡上できる川を復活させたい／03 打ち上げられたクジラの死体はその後どうなる？／04 石狩砂堤列の融雪プールとキタハウネンエビ／05 ニホンザリガニが大変だ！／06 宮部金吾とコンブ漁業／07 在来タンポポを探して／08 地域に眠る標本を掘り起こす！／09 身近な自然の調査がめざすもの／10 海辺にすむカメムシの謎／11 『フェアブル昆虫記』に登場する〈葬儀屋さん〉

第2章 プレート衝突が生み出した大地に眠るもの

12 驚きの日高山脈、世界から注目される四つの魅力！／13 縄文人も愛した？ 日高の「ヒスイ」／14 むかわ町で道内初の恐竜化石発掘！／15 なぜアンモナイトは世界中から産出するのか？

第3章 天空に広がる星と月

16 礼文島の「金環日食」観測隊／17 光害のない星空を！

第4章 ワイズユース・自然と人間の関わり

18 漁業とトッカリ／19 天災か人災か？／20 オオノガイ漁から見た湿地の文化的価値／21 海は温暖化しているのか？／  
コーヒーブレイク 読んでみませんか？ 博物館の本

第5章 大地が育む人のおおらかさ・あたたかさ

22 カニ族と様似町のおもてなし／23 離島の魅力があふれる奥尻島

第6章 北の大地で活躍した人々

24 「マルセイバタ」を東京へ売り込め！／25 北の大地に移り住んだ開拓結社「赤心社」／26 徳川農場と八雲発祥の木彫り熊／27 馬産地日高／28 〈流氷画家〉村瀬真治／29 「刷り師」赤川勲の仕事と遺産／30 名ジャンパーを輩出した余市の〈笠谷・竹鶴ジャンツェ〉／31 斎藤茂吉と守谷富太郎／  
コーヒーブレイク 船に記された記号（マーク）の意味

第7章 北海道の戦争の記憶

32 厚真町の戦争遺跡「トーチカ」が伝えるもの／33 室蘭の戦争遺跡が伝えるもの／34 樺太航路と稚内港北防波堤ドーム／35 戦争に翻弄された幻の鉄路「戸井線」

第8章 地域に残る先祖伝来の風習

36 お乳の出がよくなる「玉之江の乳母杉」／37 開拓地でお葬式はどう行なわれたか？／38 〈シシ踊り〉をめぐる冒険

第9章 アイヌ語地名とアイヌ文化の伝承

39 「北海道」の由来とアイヌ語地名／40 蝦夷地に渡った源義経の伝説／41 アイヌ工芸技術の継承

第10章 遺跡から見えてくる古代の文化・風習

42 〈シカ塚〉と〈鹿肉缶詰〉が語る人とエゾシカの関係／43 北海道のちょっと変わった縄文土器／44 縄文時代の〈木の器〉

第11章 まちの記憶と文化を刻む古い建物や資料

45 古い写真から見えてくる「町のその時」／46 「ニシン釜」はどこで作られていた？／47 「移住」してきた〈古文書〉は語る／48 〈遺跡〉は地域の大先輩／49 町の記憶と文化を刻む古い建物たち

あとがきに代えて

〈過去〉が〈未来〉を指し示す

本書の特色について、次の三点を取り上げる。

第一に、上記の章立てに明らかなように、北海道各地の多岐にわたる話題を短編で読み進めることができる。いずれのコラムも写真・図などが豊富に添えられ、あまり馴染みのない分野であっても理解しやすい。道内各地を訪れる際には、地域の魅力をより知ることができる手掛かりにもなる。

第二に、我々の暮らしの意外に身近なところに、特色ある自然・歴史・文化があることに気がつかせてくれる。同時に、それらの価値が見出されることがなければ、気がつかないままに地域の「お宝」を失う可能性があることも示唆される。価値を明らかにしていくことは、地域の方々とともに学芸員が担う役割も微力ながら大きい。本書を通して、どの地域やどの分野の執筆者も、日々の観察や地道な調査活動の中で知見を得て、本書の副題にある「残したいモノ・伝えたいモノ」としてメッセージを発信していることが伝わってくる。

第三に、地域の「お宝」を未来へ伝えることの大切さである。地域のお宝に価値を見出すこと、それらを未来へ伝えていくことは、地域の人々とともに成し得ることである。本書の最後に記された「あとがきに代えて」には、「実際に様々な話題が提供されていますが、どの話題も〈未来〉へ向けたメッセージが含まれています。」(栗原 2016 : 342)とある。学芸員それぞれの専門分野は多岐にわたるが、地域の「お宝」を保存・活用していくことに使命をもって取り組まれていることに変わりはない。本書をきっかけに、少しでも多くの方々に北海道各地の「お宝」を知っていただき、未来へ繋がる契機となることを期待したい。

最後に、筆者も本書の51編のうちの1編(第44編)として参加させていただいた。若輩ながら、多種多様な「お宝」の1編として過去からのメッセージを伝えることができたことを嬉しく思う。本書の編集委員である斎藤和範氏・澤田健氏・栗原憲一氏に、感謝申し上げます。

なお、各コラムの執筆者氏名および所属先、各コラムの題目に付けられた副題については、紙面の都合から割愛させていただいたので、ご了承いただきたい。

## 参考文献

北海道博物館協会学芸職員部会ホームページ

「コラムが本に！『北の学芸員とおきの《お宝ばなし》～北海道で残したいモノ、伝えたいコト』」 <http://www.hk-curators.jp/archives/3022>

「コラムリレー本発刊『北の学芸員とおきの《お宝ばなし》～北海道で残したいモノ、伝えたいコト』」 <http://www.hk-curators.jp/archives/2987>

(あらやま・ちえ／いしかり砂丘の風資料館)